

れども漢字を書くのが苦手。この話に出てきた1人だと病院に行くのが不安と言う人がいたが、その気持ちはよくわかる。自分も不安だ。

- ◆この話の主人公（副田さん）がこれほどに人を助けたいと思うようになったのは何故か？気になる。
- ◆一人一人生きる意味は違っていい。

10月26日水曜日

<川口正義さん、北川聡子さんの項目>

声にならない声を聞く。

あなたは存在する価値があるよ、何ができるかできないか、
何をするかしないかではなく。存在することに意味があるんだよ。
ひょっとしたら人間という社会は信じられるかもしれないよ。

Masayoshi Kawaguchi

子どもは「助けて」と言えない。

暴力があっても、これが普通の家庭だと思っている。

殴られても、お父さんお母さんが好きなんです。

貧しいのは自分のせいだと思っちゃうんですね。

Satoko Kitagawa

若者たちの感想

- ◆最初、文章自体が難しかった。(小学校高学年から不登校で、漢字の意味とかが分からない)
自分のしたいことを言うとお母さんに怒られると思うなんて、驚いた。
- ◆貧困ってこわいと思った。
- ◆自分自身には親もいるから、働かなくても生活ができと思っていたが貧困も現実にあるんだなあ。実際にそうしてみないとわからない。
- ◆生活が苦しいと心も自己肯定感を低下させる。

11月22日火曜日

<榎屋二郎さんの項目>

不登校になれない子がいる。

小さなSOSを出しても、

もっと大きな声でSOSを出している子がいると、

目立たなくなってしまう。

不登校になったから、自殺せずに済んでいる、

そんな子もかなりいるのです。

Jiro Masuya

若者たちの感想

- ◆中1の後期から不登校になれた。学校でのいじめが原因だった(学校の女子から。今でも中学生以上の女性が苦手)。不登校になれない人があるとは思えなかった。
- ◆自分は不登校の経験がない。ここに紹介された人が不登校になることが出来て生きていてよかった。
- ◆高校1年の時に3日目から不登校になった。通学の距離が遠いこともあったが通えなくなった。1年後に自主退学。自殺とかは考えたこともなかった。生きていて良かったと思う。家族のことが好き。死んでしまうなんて、◆お姉ちゃんと話せなくなると思うと怖くなる。
- ◆不登校になれない子がいる？
- ◆自分自身は小学校6年生で不整脈。診察した病院の医者には普通ではありえないと心配された。
- ◆家族とはわかりあえない、家にいたくない。
- ◆発達障害者手帳があればいいのに。理解している人が少ない。重度の人は助けてもらえるが、軽度の人にはバカにされる。

2

ちっぽけな人間だから集まるとあたたかい

ワークショップ②

児童養護施設指導員や保育士を対象に読み合わせのワークショップを実施しました。

感想

◆児童指導員 20代 1年目

- ・社会の中で埋もれがちな人たちや弱い立場にいる人たちのことを見逃さず、むしろ探し出してでも支援をしようという人たちの温かく、優しい気持ちを感じた。世の中にこのような気持ちが広がっていけば、全ての人たちがより生きやすく、生きて行けるのだろうと思った。自分もその何かのために行動したい。

◆児童指導員 20代 1年目

- ・全然知らなかったことも多かった。今、困っている人に対してすぐにすぐ対応できないこともあるが、その人たちにとっては切実な事であると改めて感じた。
- ・子どもにとって、親は絶対であり、大きな存在である。また、自分たちが貧しいということを知らず、里親宅での安全を保障された生活が、当たり前前の生活だと分からない人もいるのだと知った。

◆保育士 20代 2年目

- ・知的障害のことが多かったように感じる。聞いたことはあったが、まだまだ行き場のない人が多い。その人だけを支援するのではなく、周りにも目を向けることが大事だと思った。
- ・震災がストレスになって子どもに手を挙げてしまうとの記述があった。そのような話を聞く機会もあまりないので、この冊子を読んで知ることが出来た。
- ・居場所は大事であると感じる。地域を好まない人もいるため、その人にも目を向けていきたい。

◆児童指導員 20代 1年目

- ・児童、障害、介護だけが福祉ではなく、若い女性など広い分野で福祉は携わっていると感じた。
- ・5ページに『問題は見ようとしなければ見えない。また、社会問題として名づけられなければ人びとや社会に認識されることもない』と書かれており、メディアで取り立たされないと認知されることもなく、裏で大変さを抱えている人もいる。ちゃんと向き合えないと見えないことが多いと感じた。
- ・27ページに『子どもはうそをつく。』と書かれているが、支援の中で、自分なりに頑張っても相手には嘘をつかれることもある。諦めず粘って関わっていきたい。

◆児童指導員 20代 1年目

- ・自己肯定感がすごく大切だと思った。親も子も認められ、生きていて良いと感じられないと更に生きにくくなるということが、文章として読むと改めて実感した。

- ・どうしても施設で仕事をしていると目の前の子の『今』を見て行動してしまうが、その子の5年後10年後を見ないといけないと思う。
- ・親がいる子どもは親元へ帰ることが出来るように家族支援も今後していかななくてはならない。制度があるだけでは意味がないので、制度を活用し、活かしていきたい。

◆児童指導員 20代 2年目

- ・生の声が全ページに入っており、改めてそうだなと思った。
- ・卒園生や今ここで暮らしている子たちが、14ページにあるような女性の貧困、人間関係の貧困になるようなことがないと良いと感じた。しかし、その危うさがある子どもたちが多いので、今、一緒にいられるこの時間に子どもたちに何が出来るかを考えて関わっていきたい。
- ・多方面のことが書いてあり、一つずつ見ていくと課題が多い。児童のなかでもテーマを取り上げたらいろいろと出てくる。さまざまなジャンルに目を向けたいと思った。

◆保育士 30代 6年目

- ・良いことがたくさん書かれていると思った。今、目の前にいる子どもたちに対しても広く大きな気持ちで温かく見守りながら、どのような手立てがあるのかをこれから考えていきたいと思う。

◆児童指導員 20代 2年目

- ・読んでいてこういう子もいるのだろうなというのを感じた。
- ・あまり、具体例を聞くことがなかったので新鮮だった。もっと具体的なことを調べて知識をつけたいと感じた。

3

ちっぽけな人間だから集まるとあたたかい

ワークショップ③

2016年12月9日、助産師になるための勉強をしている学生たちに冊子「ちっぽけな人間だから集まるとあたたかい」の読み合わせと感想を述べ合うワークショップを行いました。以下は学生の感想です。

◆学生 A

自分の暮らしている世界と全く別の世界でおこっている出来事であるような気がしていた。生活困窮の子ども、非行少年などがどう感じているかを少しだけ知ることができた。そして、その考えを知れたとき「全く別の世界」のものであると考え無関心であろうとしている自分にはとした。少し目を向ければ周りにたくさんある問題だと思う。身近な問題であると気づかされたとき「この問題に対して何か自分でもできることはないか？自分ならどうするか？」といった考えがでてきた。これが私にとっての「ぬくもり」である。

◆学生 B

助けを求められることはとても幸せだなと感じた。そして、助けを求められない人に助けを求められるように支援することが私たち医療者ができる役目の一つだなと考えた。その支援とは、対象者が「ここなら頼れる！」と思い自分の思いを表現できる場を提供することなのではないかと考えた。そのためには信頼関係が大切だと考える。

また、障害とは、個人の機能的な問題というよりも、社会が作り出していることが問題なのではないかと考える。社会にいる人々の障害に対する考えが変われば、一人一人が自分でいいんだと思える社会ができ、障害や障害者に対する偏見などがなくなるのではないかと考えた。

◆学生 C

私はあたたかな家族やあたたかな友人に恵まれていると気付くことができた。だから、今、幸せだと思う。しかし、社会の中には私がまだ知らない、社会が気付いていないところでひそかに涙を流している人もいる。そういう人に対して「いつでもおいで」「1人ではないよ」と、縁側のようにぼかぼかと居心地のよい場所、或いは、人が手を差し伸べている活動があるということが分かりました。

私は助産師を目指しています。どこかでひそかに涙を流している人に対して助産師としてできることを見出していこうと思います。そして、私も対象者を安心させる温かいぬくもりのような存在である助産師になりたい。

◆学生 D

貧困や虐待、非行少年などは今の私にとって身近な事柄ではありません。それ程、私は幸せな環境で生活していると思います。そして、それらの事柄を普段の生活で感じにくいのは、存在が見えにくいだけではなく、温かい支援をしている人達がいるからなのだと気づかされました。そして、人は1人では生きられないことを再確認しました。このことから私を支えてくれている人は数えきれないくらいいて、その人達に支えられている「ぬくもり」を感じ、感謝の気持ちでいっぱいになりました。私自身もまずは周りの

人達の「ぬくもり」となって、人に温かさを与えられるような人になりたいと思います。さらに、もともと居た自分のコミュニティの枠を越えて、人の尊厳を守り続けている人たちの存在を知り、その人達の思いを知ることは助産師にとって大切なことだと感じています。それは社会的リスクのある母子を行政だけでなく、すき間のない支援方法を考え紹介できるためです。誰かのためになることは素敵なことだと思います。大変なことの方が多いはずだけれど、人への優しさは自分へも帰ってくることを信じています。

◆学生 E

日々の生活の中で大切だけれど忘れてしまった事、気付けなかったことを知ることが出来ました。いつの間にか私たち一人一人が大切な存在であるという、自分も他人も大切に思いやることができなくなってしまっているのだなと感じました。

弱い者である子どもたちの命と心の健康も守れるような人になりたいと思いました。

4

ちっぽけな人間だから集まるとあたたかい

ワークショップ④

冊子「ちっぽけな人間だから集まるとあたたかい」のワークショップを2016年9月25日に静岡市で実施した。生活困窮家庭の子どもの生活支援・学習支援をしている一般社団法人「てのひら」の活動に携わっている学生15人、大人サポーター4人、スタッフ9人が参加した。

まず、5グループに分かれ、グループ内で自己紹介した後、てのひら主宰の川口正義さんから冊子に掲載されている生活困窮の状況について説明し、具体的なケースを提示した。

その後にグループごとに話し合いを行った。

Q1: 生活困窮家庭で暮らす子どもの心象風景は？

Q2: 活動を通して、子どもたちと向きあう際に留意すべきことは？（何を大切にしたいか？）

スタッフが話し合いの中でコメントを出して、学生たちの意識を掘り下げることを行った。みなそれぞれ子どもの支援に関わっているなか、冊子内での言葉を拾い、改めてお互いの価値観を話し合えたり、本当の子どもの支援とは何かを考える貴重な機会となった。

(学生たちの感想)

◆貧困ということばはどんな意味があるのかということをよく考える機会がある。今日はたくさんの意見が聞ける機会を与えてもらってよかった。

考えること・・・を大切にこれからも生活していこうと思います。

◆みんなで貧困問題や子どもたちとの関わり方について意見を交わす機会を持つことができたといいと思います。

ふだん皆が思っていることをここまで深く聞ける時がなかったので新鮮でした。結論がでない内容もあるけれど、悩むことが大事で、意識においておくのがいいんだと思いました。これからは自分のできることをやっていきたいです。

◆子どもを社会に適応して生きていけるようにするのが教育の役割なのでしょうが、それがうまくできない子、できる環境にいない子、ハンデ（障害）のためにはじめから遠ざけられている子などの問題がある。

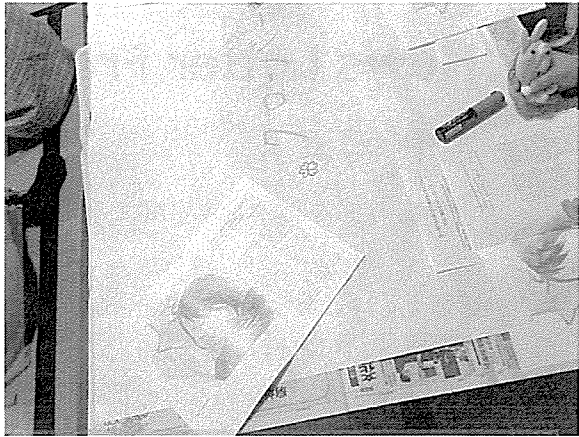
社会にある矛盾、問題を放置したまま、子どもに一方的に適応を押し付けるのが正しいのかという問題もある。

貧困対策事業への助成も、将来のコスト削減（生活保護を減らす）ための投資であり、税を使う予算獲得のために目に見えるエビデンスを示す調査を迫られている。

補-教の議論を聞いていて、改めて「社会」「子どもを社会化する」ということについて考えさせられた。勉強になりました。

◆今日はみんなから違った意見を同じ志を持つ人から聞くことができたので、勉強になった。自分たちの普通と相手の普通というものについて考えたいと思った。また、他の活動場所の雰囲気を知ることができたため、これからの話し合いなどにも生かしたい。大人の意見を聞けたというのが一番よかったです。

◆今日は途中からの参加となってしまったが、自分の意見を述べ、また他人の意見を聞くことのできる有意義な機会となった。今回の話し合いで当然答えはでなかった。これからは悩み、考えていくことができるのはいいことだと思う。常に考え、悩み、話し合っていきたい。





第2回ふじのくにニッポンの縁側フォーラム

1 日目

1

News Letter From KENYA

芦川咲さん

青年海外協力隊 2016 年度 2 次隊保健

ケニアの首都ナイロビから西へ400km、シアヤという街にやってきました。人口はおよそ80万人。ケニアには40以上の民族がありますが、そのうちの1つ、ルオ族と呼ばれる人たちが多く住んでいます。アメリカ大統領のバラク・オバマ氏の実父の出身地です。日中は皮膚がジリジリと焼けるような暑さ、日陰に入ると風が気持ちよく、朝晩は長袖を着ないと寒いほど、1日の寒暖差が大きい土地です。ここに住む人は皆とても明るく陽気で、挨拶をする際は必ず握手をします。公用語のスワヒリ語と英語、民族語のルオ語を織り交ぜて会話をしているので、私には何を話しているのかさっぱりわからず。スムーズな会話はできませんが、それでも笑顔で温かく迎え入れてくれる、優しい方達です。ケニアでは、メイズというトウモロコシの粉を湯で練りあげたウガリと呼ばれる物を主食としています。ケニア人と同じように手で食べることに少しずつ慣れてきました。シアヤに住み始めてから毎日、停電と断水に振り回されています。

私の配属先は、シアヤサブカウンティ保健事務所。公立病院の敷地内に併設されています。地域住民の健康管理、地域内の診療所の管轄をしており、医師・看護師・保健師・薬剤師・栄養士等17名で構成されるヘルスマネジメントチームの一員になりました。現在は、子どもの予防接種や妊婦健診に力を入れています。

ある1日の仕事内容を紹介します。朝の会議で、管轄内のひとつの診療所の運営がうまくいっていないため、急

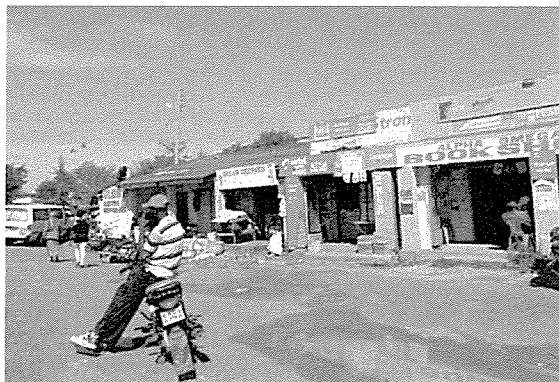


写真1: シアヤの街なか



写真2: 自宅前の道

邊視察に行くことに。皆で立ち上がり、玄関を出ました。それから出発までに1時間。車がないのです。ガソリン代や車の修理費の予算がない様子。この日はたまたま職員の知り合いが通りかかり、拾ってもらいました。

診療所まで40分。途中からコンクリート道路がなくなり、赤土の凸凹道を進んでいきます。遊園地のアトラクション並に車が揺れました。停車したかと思うと、目の前には牛の行列。通り過ぎるのをゆっくりと待ちます。

辿り着いたのは、木々に囲まれた小さな診療所でした。待合室にはニワトリ、天井には鳥の巣、床にはアリの行列、周りでは羊、ヤギ、豚の鳴き声が常に聞こえています。外と内の区別はほとんどなく、ドアも空いたままなので、患者用ベッドや薬品などは砂埃がかぶっていました。

職員が診療所内の環境をチェックして、診療所スタッフに対してフィードバック。救急患者用の処置用具の配置や、予防接種薬品の管理方法等の指導をしました。スタッフの返答は、「あなた達が急に来たから悪い。普段はできている。」でした。そして話題はスタッフの勤務体制に。8時から17時が基本のはずが、10時に来て15時に帰宅し、出勤簿には嘘の記載をしている人がおり、不公平に感じているとのこと。一緒に改善策を考えましたが、解決しないまま話し合いは終了しました。

帰り際、予防接種に来ていた母親と子ども2組を見かけました。ひとりの母親は母子手帳を持っていますが、その後ろにいた母親は、持っていませんでした。同行していたスタッフに尋ねると、印刷費用がなく、現在は在庫切れ。厚紙を使用しているとのこと。中を見せてもらうと、真っ白な紙に看護師の手書きの文字が書かれていました。ケニアの母子手帳事情を知る事も、私の活動目標のひとつ。これから詳しく確認していく予定です。

休日は、シアヤでは手に入らない物や食材を調達しに、マタツと呼ばれるぎゅうぎゅう詰めの乗り合いバスを利用し、2時間かけてキスムという大きな都市に出ています。マタツの停車中、窓から10歳ほどの少年の姿が見えました。裸足にぼろぼろの洋服、足元はおぼつかず、目もうつろ。ふらふらと歩き、排水路に倒れこんでしまいました。顔の横に落ちていた石が食べ物に見えたのか、口に運び、ゆっくりと吐き出しました。脇を通る大人は見ても見ぬふり、同い年ぐらいの子どもは、笑って通り過ぎました。私自身も何もすることはできず。心の中で、この子の命はあとどれくらいなのだろうか、とあってしまいました。

ケニアで過ごしていると、目に映るほぼすべての光景が



写真 3: 診療所



写真 4: 診療所のスタッフに予防接種薬品保管の指導をする職員



写真 5: 診療所診察室の手洗い場



写真 6: 共同で使用する井戸水

日本とは違います。違うものが多すぎて、比較するのは難しいです。そんな中、変わらないと感じたのは家族の姿です。授乳時の正しい抱き方を看護師から教わっている母親の必死な顔、赤ちゃんの頬にキスをする父親と母親、お腹をさすって出産を待ち望む妊婦さんと家族の笑顔。この光景を見ると、いつも温かい気持ちになり、日本の保健センターで働いていた頃に接していたお母さん方と子ども達を思い出します。肌の色が違って、同じ人間なのだとな安心する瞬間でした。

最近では、出産をした人のベビーシャワー、同僚の新築祝いのパーティー、クリスマスパーティー等に招いてもらい、ケニア料理を頂いたり、民族ダンスを一緒に踊ったりと、楽しい時間を過ごさせてもらっています。ケニアの人、ルオ族の人達は、人を家に招き、料理を振舞ったり歓談をすることが好きなようです。生きた鶏肉をさばいて食べさせてもらい、命を頂く、という事に改めて感謝しました。

また、こちらの地域では、結婚をする際に、新郎の家から新婦の家に牛を3頭送る風習があるようです。一夫多妻の家庭が多くあり、「僕の第二夫人にならない？」と頻繁に求婚されるので、冗談のつもりで「私の父親は、牛を100頭くれないと結婚させない、と言っていたけど、どうする？」と伝えると、本気で落ち込んでしまい、笑ってしまいました。

日本とは異なる考え方や文化を知ることは、とても勉強になり、刺激的です。アフリカの田舎町で現地の人々と生活と仕事を共にする、という貴重な2年間、積極的に現地の人々と交流して、もっともっとケニアの事を知り、学んでいきたいと思います。



写真7: 家の外でウガリの調理をする近所のお母さん

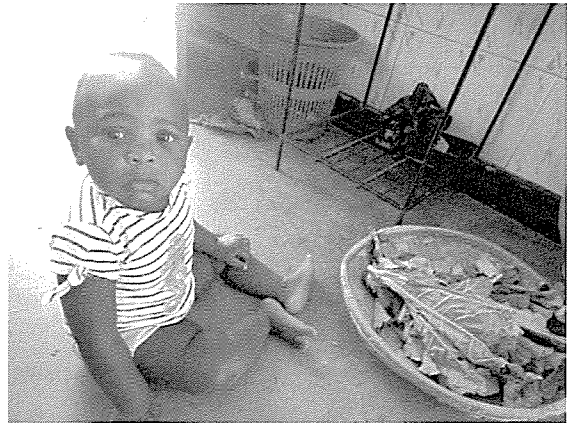


写真8: 野菜を掴んで遊んでいた生後7か月の赤ちゃん

2

ここにいるよ

あらたあおいさん

絵本作家を目指す元幼稚園の先生

あたたかいご縁があって、2016年から縁側フォーラムさんの冊子やイベントの絵を描かせていただいています。あらたあおいです。絵本作家になる夢を追いかけながら絵描きをしています。普段は、個展やライブペイント、オーダーメイドで絵を描き、時には子どもたちと絵を描く時間を作り楽しんでます。

昨年の5月に息子が生まれ、育児が中心となった今は、なかなか描きたいときに描く!ということができない日々ですが、それもまた小さな幸せです。

縁側フォーラムさんの冊子のための作品を描き始めたころ、息子はまだお腹の中。

私のおなかをけて「ここにいるよ。」とあいずをくれていました。

大きなおなかを毎日さすって「いつ会えるかなあ」なんて声をかけながら、描いた事をおもいだします。子どもたち・赤ちゃんの絵を というワードに気をとられ、失礼ながら、みなさんの活動内容をきちんと理解していないまま描いた というのが正直なところでした。

ただ ただ、愛おしい我が子の誕生を待ちながら、また、幼稚園で働いていた頃に出会った可愛い教え子たちを思い出しながら、描いた絵です。

なので、できあがったよ!と、届けていただいた冊子のみなさんの文章を、わたしは1日に1ページ読むことがやっとでした。私の絵に込めた想いと、まるで正反対のような子どもたちの現実。そんな子どもたちの身に起きている問題が時に頭のなかで我が子や教え子と重ねてしまい、身近に感じ、涙が出ました。

全て読み終え、何度も読み返すたびに私の絵が、フォーラムのみなさんの抱く願いに少しでも寄り添えていますように と、ほんやり思い、願いました。

幼稚園に勤めていたころ、私の大好きな事で子どもたちのためになにかしてあげたくて、目指し始めのが絵本作家になるという夢です。休日を利用して兵庫県まで毎週絵本の塾に通いました。

憧れの絵本作家さんたちから、刺激やたくさんのかきかけをもらいました。

あれから5年、思いのほかプロへのみちのりは長くなりそうですが、道草をたのしみながら私のペースですすんでゆきたいです。「先生ね、絵本作家になりたいんだ」で幼稚園を卒園した日に子どもたちに話したので、時間はかかっても絶対に夢を叶えます。

教え子たちがいつか親になるころ、かわいい子どもたちに読んであげられるよう、頑張るつもりです。

眠る前に、大好きな人にお布団の中で読んでもらいたくなる、そんな絵本をつくりたいんです。これだっていうお話しを言葉にして、文にして、大好きな色をいっぱい使って、大好きな絵を自信をもって描きたい。

そして、大好きな人に、届いて欲しい。

とは言っても、私は生涯、子どもたちの描く世界にはとうてい敵わないような気がします。子どもたちの描く、点も線も、色も、心の表し方も、ほんとうにおもしろくて、時には不思議で、魅力的なんです。



あらたあおいさん

わたしは、そんな子どもたちのアートの世界がたまらなく大好きで、その時間に触れていたくて、時々そんな時間を作りに出かけたりもします。

縁側フォーラムさんの企画で12月に開かせていただいた「おそらにおほしをうかべよう」のお絵描きの時間の事、少しお話しさせてください。

0歳から6年生までの子どもたち17人。はじめて出会う子どもたちも多かった中、仲よしになるきっかけは会場の準備でした。大きな紙にこだわっているため、準備も一苦勞です。



模造紙を貼り合わせたり、汚れを気にせず製作させてあげるために、たくさんの新聞紙も敷きます。みんなお手伝いが大好きで、自然と言葉をかわせました。

私からみたらお手伝い、でも子どもたちからしたら「なんかおもしろそう」というドキドキがもううまれていたんですね。みんなで作品を描くなかで大切にしたい「一緒に」の気持ちのきっかけづくり、ふいうちで大成功でした。

絵の時間のはじまりには、私の作った絵本を読んでいます。

じっと見てくれる顔も、お話の途中で時々眼が合う瞬間も、絵を指差してくれるしぐさも、終わった後のにっこり笑顔も、たまらなくうれしい時間です。

一見ぐるぐるでぐちゃぐちゃなぐりがきに夢中になっていた2歳の男の子。

紙の上に体ごとのって、どの色にしようかなって、ちゃんと色を選んでいたんですよ。お隣のお兄さんの絵が気になって、まねっこを楽しんでいた5歳の男の子は、途中から大きな太陽と一緒に塗ってうれしそうにしていました。いつのまにか、空の絵は、宇宙の絵に、、、。

空にあったらたのしいなって思うものならなんだって描いちゃおう、というテーマに加え、今回は自分をかいてから というお願いも。ちいさな赤ちゃんの絵はお姉さんお兄さんが描いてくれました。作品のなかに自分がいる、大きな空のなかに自分がいる、完成した時そんなふうに感じてほしくてかけた言葉でした。

絵の具が登場してからは、毎回、子どもたちの生みだしてくれる偶然の色合いに感動します。ふではおいて、最後はみんなの手で塗りました!「絵の具ってきもちー!」と、小学生。そうそう絵の具だらけ、気持ちいいです!この言葉が聞けて、わたしも気持ち良かった!

わたしも大きな作品はかならず指やてのひらを使って描きます!たのしいし、気持ちいいから。描いている時、音楽だって、あったほうが楽しいんです!

最後、みんなでいっしょにお空にうかべた手形のお星様、これで完成!「できたー」の顔、いい顔でした。もっともっとお話ししたいエピソードはたくさんあるのですが、最後に。。。

またねって挨拶をしてから、また側に来てくれた子がいました。

その子は小さな声で「くも、ほしいです」そう言いました。じつは、描き始めるまえ、イメージづくりのためにブルーシートの上に、わたしが紙をざっと切って作った雲をみんなでうかべたんです、ほら、雲がうかんだ、ここはもう空の上だね!って。

製作途中にその子が「この雲どうするの」って言うから、お家に帰る時にあげるねって約束したことを思い出しました。すっかり忘れていて、うっかり捨ててしまうところでした。

こんな時に、思うんです、子どもってやっぱりいいなあって。おもしろいなあって。

上手かどうかではないんです。どれだけイメージの世界にあそびに行けたかどうか。どれだけ、絵の具と仲よしになれたか。どれだけその瞬間をたのしめたか。

自分のお気に入りの作品になったか、お気に入りのみつげられたか。

子どもたちと製作するなかで、そこを私は追及していけたらいいなと思います。

今の私が絵を通じて子どもたちのためにできる事は、たのしいお絵描きの時間づくりですから。

子どもたちも、描いてる瞬間は、アーティスト。大人のみなさんには、そんなふうにしてあたたかく、子どもたちと、生まれてくる作品を見守ってほしいです。

余談ですが、製作途中、私のアシストに回ってくれた主人。あれ、任せていたはずの息子は？ときよきよろすると、参加者の保護者のかたが「みてるから大丈夫ですよ、子ども1人2人かわらないので」と、笑顔で息子を抱いていてくれました。

会場の雰囲気がとても気持ちよく、すすめやすかったのはその場に集まってくれた大人のみなさんのあたたかさでした。サポート本当にありがとうございました。

子どもたちと絵を描いたり、子どもたちと過ごしていると思うんです。

いろいろな考えや意見があふれている中でも、最終的に向いている方向が一緒なら、きっといい作戦が見つかるって。

子どもは子どもだからできる事、子どもなりにできる事を。

大人は、大人だからできる事、大人なりにできることを。

考えて悩んでいるうちに、子どもと大人の境界線がなくなって

わたしだからできる事、わたしなりにできる事

みんながみつけれたらいいクラスに

いい仲間に

いい地域に

いい街に

いい社会に なくなっていくんじゃないかなって思います。

私は今は、息子との時間を1番に。

出会った子どもたちとの、かけがえのない思い出と、これから出会う子どもたちとのわくわく、また会えるかなっていうじんわりした楽しみを胸に、絵を描いて生きたいです。

自分の夢も、大切に、過ごしていきたいなあと思っています。

息子の寝顔を隣に見ながら夜な夜な作品製作にはげむ時もあれば、主人や両親に育児を助けてもらいながら活動する日もあります。いつも支えてくれて、夢も育児も応援してくれる家族に感謝です。

縁側フォーラムさんのみなさんのおかげで、間接的ではありますが「子どもたちのために」絵を描くことができ、とても幸せに思います。

また次の作品も、楽しみにしていて下さい。

描かせて下さり、本当にありがとうございます。1人でも多くの方に、みなさんの想いを届けるお手伝いができたら幸いに思います。

3

記念講演「子ども・若者の生活困窮と社会」

湯浅誠さん

法政大学教授 / 社会活動家

私も子ども食堂とかに関わってるんですけどね、結局そこで必要になることは同じことだなんて思うんですよね。例えばこういうケースがあります。子ども食堂でみんなで鍋をつついてましたと。そしたらそこに来た女の子が高校生らしいんですが、高校生の女の子がこういったと「みんなで鍋をつつくって本当にあるんだね」と。その子は今まで一度も家族で鍋をつついたことがなかったということですね。その光景が目の前で起こったことで、驚いたということですね。テレビでは見たことがある、でもテレビの中っていうのはあり得ないことが起こりますね、あり得ない美男美女が恋愛したり。人が空を飛んだりしますね。あの類だと思っていた。ゆずぼんのCMとか見た時にね。そういうもんだと思っていたら現実に目の前で行われてきちゃって、あらこれってホントにあるんだと言って驚いた。っていうことですね。

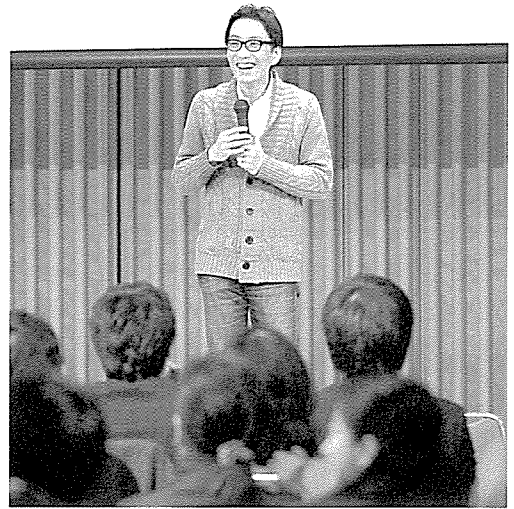
それは周りの人を驚かす出来事な訳です。あ、そうなの？っていう感じだった。多くの人にとっては、それは当たり前のこと

なんで、別に特別なことじゃなくて、でも特別じゃないことに驚いた彼女に驚いたっていうことになる訳ですけど、それが当たり前を共有していないってことですよ。自分の当たり前が、その人の当たり前じゃない。他人が何を当たり前としてないか、驚くかっていうのは、実はわからないですよ。分からない。分からないので、大事なことは、例えば子どもに対して親がどう接するか、親が接する時に大事なことは色々な体験をさせようと接する訳ですね。子どもは何がヒットするか分からないので。なので海にも連れてきたい、山へも連れてきたい、川にも連れてきたい、色々な体験をさせたい。サッカーもやらせてみたい、野球もやらせてみたい、ピアノも習わせてみたい、何にヒットするか分からないから色々な体験をさせる中で、面白いはまるが出てくればそれを伸びて行けばいいな、という風にして関わっていく。

そういう色々な体験のできる場所というのが、人によっては家族から提供されない子どもがいる。なので子ども食堂とか、学習支援とか、居場所作りとか、言葉はなんでもいいんですけど、そういうことを通じて色々な価値観を持つ大人に触れたり、色々な多様な体験をしたりすることで、何かスイッチが入ることに出くわすことを目指すんですね。大事なことは食事とか学習以上に、それと同等または以上に、学習とか食事はツールですよ。そのツールをきっかけに集まった人が、そこで新たな人間関係作ったり、新たな価値観を身に付けたり、新たな体験を持つこと。それを何とか提供しようとして色々な人が色々なことをやっています。結局その新たな体験とか新しい価値観とかは大学生、現役の大学生っていうのが世の中にいるんだ。あーこういう人なんだ。働いてる大人に初めて会った。そういう体験を積み重ねていくことが結局人生の選択肢を広げるとのことなんだ、っていうことですね。なので、その人生の選択肢を広げるとのことを目指して、色々な人が色々なことをやられていることが一つ一つ個別ですけど関わっているということになります。

人を支援するっていうのは自分の当たり前を問うことだっていう風にいいですね。これはみなさんの中で常識になっていますね。結局、私の当たり前と違う当たり前と向き合うっていうのが人と関わるってことなんで、それは自分の当たり前が揺らぐ経験でもあるんですね。

朝、昼夜逆転せずに寝て起きるのが当たり前だと思って生きてきたけど、そうじゃない人と出会った。なんで俺はそれが当たり前だと思って生きてきたんだろうな、みたいなね。こういう時にはこういう風にするもんだと疑問に思わず40年間生きてきちゃったけど、それが当たり前としていない人に出会った。なんでそれを俺はそれが当たり前だと思っていたんだろうな。そういう風なことが人を支援するっていうことです



湯浅誠さん

よね。なので、なんでお前はこの当たり前ができないんだ？みたいな風に関わるとその支援活動はうまくいかない。ある枠にあてはめようとする活動になっちゃうんですね。

そのことが一番わかるのが、皆さんのやられている支援なんですよ。相手は子どもであれ障害であれ、と私は思っています。そうすると福祉の仕事、あるいはこうした分野の子ども若者、あるいは生活困窮、あるいは高齢、障害そうしたものの社会の関わりっていうのは、こういう人たちがいて、そういう人たちを包み込めるような社会に、という風に言われたりするんですけど、もうちょっとなんというか社会の組み換えを迫るものなんですよ。

色んな人たちがいますと。それは多くの人達にとってできるのが当たり前だろうということができない人がいますと。で、そういう人を他の人と同じようにできる所に持っていくのが支援なんだと。特に生活困窮、私に関わってきた貧困の分野なんかですとね、ずいぶん怒られるもんなんですよ。「なんでお前こんなこともできないんだ」ってね。「なんでこんなこともできないんだ」って言われるとですね、あんたがこの世の中で生きていくためには、はきはきと面接が受けられないといけないし、履歴書も上手に書けないといけないし、あれもできないといけないし、これもできないといけないし、それができないとあんた暮らせないんだよと、いう風に言われるんですね。実際にはそれをずっと鍛えられる訳なんですけど、こういう働き方ができないとダメ、残業があったら嫌だとか、そんなことを言われる場合じゃないでしょ？とか言われる訳ですね。そんな贅沢言って生きてられると思ってるんですか？とか、みんなそんな楽しんでませんよとか、私は何時間も残業してますよとか、そういうことを延々と怒られ続けて、みんななんか自分はだめなんだな、自分はだめなんだな、自分はだめなんだな、直さなきゃいけないんだなって思ってやってくっというのが大人の生活困窮とか貧困の分野のずっとあった現実なんですけど、そうしたこうなっていうかな、あるルールの中に入っていき同化していく、なじんで同化していくという形での認められ方ですね。そうしたものはちょっと違うことをきっとみなさんなり、私達の活動は求めている、それは色んな人達がいるから、社会が優しく包み込んで下さいね、そういう意味でソーシャルインクルージョンという言葉が使われることがありますが、もうちょっと世の中に対して、あんたたち自身が変わらなきゃいけないんじゃないの？健全者という障害を気づかなきゃいけないんじゃないの？あるいは人を支援するっていうのは自分の当たり前を疑うってことだよっていう、なんであなたは自分の当たり前を疑えないの？っていうようなことを相手に伝わるような形で言うってことなんだろうと思うんですね。その相手に伝わるような形で言うってことを積み重ねていく中で、世の中を変えていくっていうのがたぶんソーシャルアクションというものなんだろうと思う訳です。よくソーシャルワーカーはケースワークやってる訳じゃなくて、ソーシャルアクションが大事なんだよって言いますね。で、そのソーシャルアクションっていうのは、狭い意味ではこのAさんという方がいて、この方が大変だからこの方が生きていけるように家族にも働きかけます。あるいはこの方が社会参加できるように就職先を探します。そういう意味で家族に働きかけたり、地域資源に働きかけたりすることをソーシャルアクションって言うたりする訳ですけど、あるいはこの子に行き場所がないので、その子の居場所を世の中に作りましょう。これがソーシャルアクションなんですけど、より広い意味のソーシャルアクションというところ、そこでそうしたことを通じてなぜこの人がうまく生きていけなくなるのかをあんたに考えてもらう、あんたも考えなきゃいけない、あんたも考えなきゃいけないっていうのを周辺の人たちに働きかけていくというのがソーシャルアクション、広い意味でのソーシャルアクションなんですよ。そうすると私、社会活動家と名乗ってますが、社会活動家というものとソーシャルワーカーの区別はなくなりますね。私はそういうつもりで社会活動家と言う風に言っているんですけど、やっぱり長期的には世の中の価値観を変えないといけない。

「マイノリティ」ですね、「マイノリティ」の人たちが、世の中に生きていくスペースを「ここならいいよ」と言われて許される、そうやって隙間になんとか、なんとか、なんとか、なんとか収まっている、肩身の狭い思いをしながらも生きることを許されている。すみませんね、すみませんね、すみませんね、って言いながらですね、というような感じが正直率直な所だと思うんですけど、そうした所を変えていくのが、たぶん皆さんのお仕事なんだろうと思います。それは本来できるはずの人たちだと思うんです。なぜかというところ、当たり前、自分の当たり前じゃない人達と付き合うこと、あるいはそれを意識的に付き合うことにとっても長けている人たちだから。そういうことばかりやってきて、そういうことを意識しながらお仕事されている方たちなんですよ。なので、それは対利用者さんに向かうだけじゃなくて、一般市民の方たちにもそれは使えるはずなんですよ。使えるっていうのは、自分と相手の間にブリッジするっていう。そのスキルが発達した人たちだから。だから市民の色んな立場の人たちにも働きかけられる力がある訳ですよ。相談受けてたり、色んな人と接している、利用者さんと接していると、だんだん手持ちの札が増えていきますよね。手



持ちの札が増えるっていうのは、ある局面にぶつかった時に通り一遍の対応では上手くいかないの、じゃあ次はこうしてみようとか、次はああしてみようとか、色んなやり方を身につけますよね。それが言ってみればピッチャーが色んな玉を投げられるようになるようなものです。ストレートしか投げられなかったピッチャーがカーブを投げられるようになり、シュートを投げられるようになり、フォークを投げられるようになる。そういうことです。この人にはこういう風に、この人にはこういう風に、対応の仕方を変えることもあるし、同じ人に対してもストレートを投げる時もあれば、カーブを投げる時もあれば、シュートを投げる時もあるんですよ。そういうことをいっぱい持っている、球種をいっぱい持っている。相談員としての力量ですね。だからどんな人が来ても、どんな利用者さんに対しても、どんな相談者に対しても、どっしり構えて対応ができる訳ですね。大丈夫、自分はだれが来ても対応できるって、思っている訳ですよ。そういうことができるようになると、いっぱい球種を持っているからこそ、新しいボールを身に着けることができる。開発することもできるかもしれない、それがイノベーションっていうやつですね。新しい組み合わせを想像する。そういうことが皆さんの日々のお仕事な訳ですね。対利用者さんと会う時だけじゃなくて、町の商店街のおっちゃんという部族と話す時、あるいは自治会の役員さんという部族と話す時、あるいは学校の先生という部族と話す時、あるいはとてもそのことに偏見を持っている住民という部族と話す時に役に立つわけですね。それが民主主義の足腰を鍛えると私は思っている。

色んな人と回路を通じさせるということは、つまり色んな人をテーブルにつくことができる。民主主義の力量のかなりの領域は、人々をテーブルにつける力だと思えるんですよ。同じテーブルを囲ませる力です。これは結構難しいですね。呼びかける人が多くの人から信頼されないと「お前が呼びかけるんだったら俺は行かない」って人が続々出てくる。あるいは「あいつが来るなら俺は行かない」って人も出るんですね。そういう中で、結局なんどテーブルを作っても、来た人は同じような人たちしか来ない。だからそこで結論を出しても、その結論が多くの人に尊重されない。だって、どうせそういう意見の人たちで決めたんでしょってなる。それが多様な人を集めるというのが民主主義の大きな力。なので、それができないと自分としては開かれた心で色んな人と話しているつもりなだけで、結果的に何かの時に集まってくれる人は、一歩外から見ると同じような人ばかり、ということになるんですね。そうなると合意形成は作れない。

民主主義って言葉が高くて広すぎるのであれば、地域作りですね。それぞれの地域において、その地域を

作るベースになる力を持っている人たちなんですね。色々な人たちのテーブルに集める力、あるいは色々な人たちに私という部族とあなたという部族の間に橋を架ける力。それが本来のソーシャルワークなんだろうと。

生活困窮者支援をします、あるいは子どもの支援をします、あるいは若者の支援をします。個別対応やっています。個別対応をやっているけど、そこだけでは色々限界があります。ケースワークだけでは限界があります。色々な分野の人とそれぞれ商福連携だ、農福連携だ、いろんなことが分かりましたが、そうした他分野の人とも連携しながら、他分野共同、他業種連携でやって行きましょう。そうしたことが地域づくりに結びついていくんです。という風に言ったりします、ケースワークからソーシャルワークそしてソーシャルアクションへって言ったりする訳ですけど、これは私が逆の方から言いました、原理的にはそこで問われていることは、本質的には同じことだからと思っているからです。

みなさんのように分野でやってきた多くの人を感じているように、やまゆり園のような事件のような価値観ってというのは、やっぱり世の中にある訳ですよ。私たちだって持っているんですよ。余裕がなくなればですね、「さっさとして」っていう風に思うことはある、「で？結局何が言いたいのか？」とかっていう風に言いたくなる時もある訳ですね。で、そういう風にして、その無駄、効率的でないもの、無駄だと言われるもの、そしてテキパキできないこと、そうしたことを価値がないことにして解離していくっていうのが、私たちの中にもある。そうしたものが、非常にいびつな形で凝縮して、ああいうこと（相模原事件）が起こるだと思うんですけど。その在り方に私たちは違和感を持つ。おかしいと思う。おかしいと思うから、それを変えてかないといけないということになる。でもそのことが、現実を広めていかないとそれは変わらない。じゃあ現実を広めていけるかということになると、そこでぶつかるのは私とその相手の当たり前の違いですね。あまりにも当たり前が違いすぎて同じ話ができない。障害という問題についての理解があまりにも違いすぎる。そうした弱者に優しくするみたいな話が全く通じない、そんなこと考えたこともないという人と、それでも話をしないと結局こちらは少数者のままで何かあった時にやられてしまう。その時にたぶん必要なのは、「なんでわかってくれないんだ」と苛立つことでもなく、「分かってくれないんだ、まいっちゃうよね」という風に仲間内で酒を飲みながら嘆くだけのことでなく、そこに橋を架けていくことなんだと思うんです。そしてそれがソーシャルアクションなんだと思う。

なんで、私は私自身そう思ってやっていますし、皆さんにもそれをお願いしたいですけど、何度も言いますが、自分たちの仕事、あるいは自分たちがこの仕事を通じて培ってきたスキルや能力っていうのは、社会、地域づくり、民主主義にとって、欠かせないインフラなんだ。だからそれをもっと広く社会のために活用しなくてはいけない。活用できるし、活用しなきゃいけない。という風に思ってぜひやって頂きたい。し、その力を発揮して頂きたいと思います。



4

記念講演 2「怒りとやさしく付き合う」

北川聡子さん

社会福祉法人「麦の子会」総合施設長

障害のある子供とか社会的養育が必要として
る子供たちを法人として見てますけれども、ひ
とりひとりの力は凄く養育力とかがあるわけ
ではないですけどみんなで子供を育てるって事で、
一人の子供を育てるには村中の大人の知恵と愛
と教養が必要って事を一緒に子供を育てていま
す。

もう何もない時代にだったんですけども、北
海道で障害がある子の支援施設を立ち上げて今
に至ります。だんだん大きくなってくと、思春
期特有の課題が出てきがちなので不登校とか暴
力とか。勉強もなかなか難しくなっていくので
学力支援を受けたりしています。社会的養護の
必要な子がファミリーホームとか里親さんを
やってひとが多くて、大体30人くらいの子供た
ちが育っている。子供だけを育てるのではなく

て、お母さんお父さんも一緒に、っていう事で、ただやはりあの障害のある子を育てるお母さんはやはりそ
こ受け入れる所が難しいというか、当然なんですけどもその辺のケアってのが大事になってくるかなと思
います。

お母さん同士集まったり、グループカウンセリングやったり、個別カウンセリングやったり、ピアカウ
ンセリングやったり、こういうことを大事にしています。DVの問題とか、401名中94名がシングルマザーで、
シングルファーザーもいたりとかちょっとやっぱり支援が必要な家族が多くなっています。で暮らしの支援
として卒園児のママたちがヘルパーに入ったりショートステイホームを普通に街を上げて行っています。
ホントに子供たちを支援していて、障害児の分野ですけども、妊娠の時も出産の時もいろいろあったり、シ
ングルマザーだったり、虐待の存在だったり、差別だったり、摂食障害が出てきたり、不登校だったり、色
んな課題が底辺でつながっているなと思います。まだまだ一般の福祉サービスが追いついてなくて、非行
の団体のお母さんに聴いたら年間5000人も滝の修行をするお寺に子供たちが行っているということで、地
域の制度がついて行っていないというふうに実感しました。子供たちが大人になっていく為には、障害が
ある子もない子も存在が肯定されて自分らしく生きていく場所が必要だなって思います。そしてもう障害
も何も関係なく親も子供も地域の応援団を増やすのが大事だと思うし、虐待には複合的な、DVやシングル
ファーザーとかステップファミリーとか色々な複合的な問題がありますけども、子供の方の要因としてはや
はり障害のある子も率が一番高かったんですね。子供をケアするとともにやっぱり家族を孤立させてはい
けないなと思って仕事しています。

それでは具体的なアンガーマネジメントを通して子供たちにやっぱり適切な環境だったり、脳の傷つきと
かを出来るだけ少なくした、そういう関わりが必要と思うのでアンガーマネジメントのお話をさせていただ
きたいと思います。実はアンガーマネジメントというのは、怒らなくなるっていうことではなくって、怒る
必要のある事は怒れて、怒る必要のない事は怒らないっていう、本当に怒らないっていうことを目的にし
てるのではなくって、怒りをマネージメントして、より後悔しないことを目的としています。アンガーマネ
ジメントをちょっとできるようになると、怒った事に後悔しなくなったり、それから他の人をやっぱり傷つけ
ちゃったりするので、怒りというのは。それから人を傷つけなかったり、あと自分を傷つけなかったり、モ
ノを傷つけなかったり、モノを壊さなかったり、上手に怒っていることを表現できるようになる事を目指し
ています。

喜怒哀楽の一つの感情ですから、誰でも持っているわけです。でまた、怒りはエネルギーの元になって、



北川聡子さん

例えば何か社会の中で課題があったり、差別があったり、不公平なことがあったら、やっぱり政治活動を起こしたり、よりよい社会にするといったエネルギーになったりします。

私たち身を守るために動物的なものなんですから虐待とかパワハラとか受けた時に怒りは自分を守るエネルギーにもなります。

では、問題となる怒りはどんな怒りでしょうか。強度が高い、一度怒ると止まらなくなる、強く怒っちゃうとか、持続性があるですね。ホントにこう一生その人に対して怒りを感じたり、孫や子の代までという事も聞いたりしたこともあります。もうそれは怒りの範疇を超えて、憎しみだとか、ホントにこう恨みだとかそういう段階になっていくものです。

しょっちゅうイライラしたり、カチンとすることが多いと言う、怒りの頻度が多いのも問題です。嫌味とか皮肉とかも不健全なコミュニケーション。だからしょっちゅう嫌味を言っている人もいるかもしれないけど、不健全なコミュニケーションになります。それから、人を傷つけたり、自分を傷つけたり、モノを壊したり、そういうのもやっぱり問題となる対処ですね。ただ、思春期の辛い時期に、家庭内暴力とかで表現したりする子供もいますけれどもそれは、奥に潜む感情とかそういうことを理解していくって事にやっぱり関わっていく事も大事になっていくんで、子どもの場合はどうやったら解決していったり、理解していったり出来るのかなっていうふうに考えたらいいと思います。

次は怒りのメカニズムです。これがとても大事なことだと思うんですけども、実は怒りっていうのは、二次感情になります。二次感情というのはその下に一次感情があるわけですので、例えば悲しさだとか、不安だとか、辛さだとか、傷ついた気持ち、恐れ、侵入された気持ちとか、認められなかったとか、愛されなかった気持ち、期待が裏切られた時とか、罪の意識に駆られる気持ち、人に拒否された時、辛いですよね。それからホントにそういう気持ちが寂しかったとかそういう一次感情が溢れて怒りになってしまいます。相手は自分の下にある一次感情を理解することで、相手を理解したり、自分の感情を爆発させることが少なくなるかもしれないので、怒りって感情は、ホントに下にある感情がこんなに理解されたいって感情なんだということ覚えておくと相手のことを理解しやすくなるかと思います。最近皆さんは自分が怒ったこと覚えていますか。すごく頭にきたこと、まあまあ頭にきたこと、軽くイラッとしたこと、ちょっと一分くらいで書いてもらえますか。後でこれ使いますので。福祉関係の仕事をしていると、やっぱり怒りの問題と適切に付き合うって大事なので自分がどんな事で怒ったのかなとか腹立ったかななど。私が頭にきたことはよくわかるんですけども、ケース会議を開いていて全然食事とってないじゃないかって家庭の体重も増えてない身長も増えてないし伸び盛りののにケースカンファレンスで「じゃあ、子供食堂になんとか誘いましょう。」って言うふうにみんなで決めたんですけど、結果として午後7時になってその子は子供食堂に来てなかった。そのまま学習支援の方に来ていてそれでまあそれから食堂の方連れてったんですけど、参加していた誰もが責任持たなかったって時に「えー。」みたいなそういうまあまあ腹が立ちました。

次はアンガーマネジメント技法の一つです。実は、アンガーマネジメントでは怒りのピークには長さがあると言われて、長くて6秒言われています。この間にやってはいけない事は反射的な行動です。言い返すとかそれから怒鳴るとか物を投げるとか、売り言葉に買い言葉なんかもやってはいけない事なんですね。で6秒我慢すればなんとかこう対人関係が悪くならないでなんとか適切なやり取りができるようになるっていうふうに言われていますのでこの6秒がとても大事になっています。で6秒を待てば怒りのスタートを止めることができます。それでは、6秒待つためにどうしたらいいかと言うことで例えば「これについて頭にきている」とか「ああ、あの先生にこう言われたことが嫌だったんだ」と手のひらに吐くって事が、ひとつの応方法になります。って、いうのはイライラしている時あるいは出そうになった時に気をそらすんですよ。それから、6秒のクールダウンにはやはり深呼吸ですね。いつも言っているんですけど、たかが深呼吸されど深呼吸、深呼吸をとにかく繰り返すって事も反射的な行動を取らなくて済みます。あとこのへんに見えるものを5つ考える。マイクであるとかここにはお水があるとか、皆さんの周りだったら机は白いか青い椅子に座っているとかそういう芸術的な見えているもの5つ考えて意識するって事も大事です。天井の隅っこを見つめてこう眼球運動みたいにするっていうのも反射的な行動を取らないです。あとお水を飲んだりですね。それから数を数えて、たんに1234じゃなくて、100 98 96っていうふうにちょっと難しい数の数え方をしたりなんかをするのも、この6秒を先に進ませないっていう方法になります。

それから今までアンガーマネジメントがなかなか進まなかったのは尺度がないからって言われています。とにかく主観的にで良いので、今日のムカツキは7とか朝は2ぐらいの嫌なことがあったとか子供にわんわん泣かれてイライラした3ぐらいだとか、そんなふうに客観視することがとても大事でそれを繰り返していきうちにだんだん点数が少なくなっていくと言われてます。先ほどの皆さんやってみた自分のイライ

ラ度は一番腹たったのは何度くらいで中間くらいは何度くらいでちょっとは何度くらいかなっていうふうにちょっと客観的に自分を見ていくって事でけっこう楽しくなって「今ちょっとイライラしたから2ぐらいかなあ」とか自分で思っていくうちに段々と怒ったら「これくらいだ」って言って思っているうちに態度を相手、例えば店員さんに嫌な思いされても「あっ今2ぐらいの気持ちだわ」なんて思っているうちに店員さんとのやり取りでちょっと嫌なこと言わなくなったりするって言われています。

では次に、やはりあの言葉にするってことが大事ですね。言葉にすると手が出なくなるってのは保育園の年長さんぐらいになると喧嘩が減るのと同じです。言葉で表現できると怒りが見えるようになるので怒りに振り回されなくなります。こんなふうに日本語にはたくさんたくさん怒りの言葉があるので、皆さんもこう怒りを表現できるようになる事で、「辛かったんだなあ」って事で怒りを表現できるようになると少しクールダウンできるようになります。特に私なんかお父さんお母さんの夫婦喧嘩の面接を時々するんですけども、やっぱり男の人の方が口達者で、あっ口達者なお母さんに負けちゃうんですね。それでお父さんが腹立てて「うるさい」って感じで手を出してしまったり、そういう事が多々あります。女性に比べると男性は言葉が少なく自分の気持ちの表現が苦手なので最近女性のDVが高くなったって言われていますけど、まだまだなので男性のDV率が高くなってしまっているのはこの辺にも原因があるかもしれません。

それからアンガーマネジメントの暗号の2つ目ですが、実はですね1つ目は反射的にやらないって事が大事なことです。言い返したりしないって事で、私も時々会議なんかで反射的に「あっあの人、ちょっと変なこと言ってる」って言いたい時なんかもちょっと6秒待つってのは冷静に相手に理解して見ているようで意見を出せたりするので、アンガーマネジメントと言うだけでなく反射的な行動をとらない所では覚えておいてもらうとメリットになるかなと思います。

2つ目は、実は怒りっていうのは「あの人のせいで」とか「あの事があったから」とかそれから「何か自分以外のことで」とみんな思うんですね。怒ってた女の子がいるんですけど、「まあまあまあ、怒りっていうのはね、相手せいじゃなくて自分の中にあるんだよ」って言ったら「あっ!」。私たちが怒らせるものは誰かでもなく出来事でもなく何かでもなく、ホントの怒りの正体は私たちが思っている「べき」ということなんです。怒る理由が相手にこうあるべきだという、理想と現実のギャップがあって理想の自分があるって理想の自分のべきが裏切られた怒りが出てきます。自分の持っているべき怒りがこういう「べき」っていう事に発生します。それは譲れない信念とか価値観とか誰でも知らず知らずのうちに持つて自分にとっては当たり前のこと、さっきの話とつながりますけど自分にとっては当たり前って事と相手が違った時に怒りは発症します。例えば、約束は守るべきだと思っている人と、まあそうそう守らなくてもいいと思っている人では、「なんで遅れるの?時間通り来るべきでしょう」っていう気持ちになりますよね。帰ってきたら綺麗であって欲しい、でもお母さんはなかなかお掃除、子育て大変でしょう家事もしてお掃除もできないのに、家は綺麗であるべきだ。って、ところでやっぱりトラブルになります。夫婦関係とか恋人との関係とかそういう所で理解し合うってのは同じなんですけど、やっぱりそれと同じように、こうあるべきだっていうのを相手に押し付けちゃって怒りになるかなって、いうふうに思います。

次はすごく大事なところなんですけど、実は自分と同じ価値観とか同じ考え方の人では、怒りは起きないですね。自分と同じ考え方なんですから。ちょっと自分と違うけどこれは許せるところでも、あんまり怒りは起きません。怒りが起こるのは、やはり自分と違って許容できないっていうそう言う所で怒りは起きるわけです。例えば、運動会の時にタバコを吸ってた人がいたんですね。で、すごく強迫的なママだったんですけども、怒っちゃってもう子供の行事の時にタバコを吸うなんて多くの人がタバコを吸ってもいいんじゃないかと思っても、そのお母さんにとってみたらやっぱり許せないことだったんで、本部席に行って「タバコをやめるように放送してください」。やはり自分と違って許容できない境界線が怒りをもたらし生じさせます。でも実は、この境界線ってのは一人一人によって決まっている事ではないですよ。決まってるんですけど、実はいろんな状況で変わるという事なんです。だから境界線を大きくするっていう事が、凄く大事な事となっています。小さい時に親に適切に愛されなかった子供と出会った時に、とんでもない考えられないことが起きたりするってわけですけども、やはりここを理解して支援のやり方を考えて対応していくって事がとっても大事な事なんじゃないかなと思います。

3つ目です。まず自分の怒りはコントロールできるかどうかということを考えます。コントロールできそうな事できなさそうな事で重要な事であれば努力していつまでにどの程度変わったら自分は気が済むのか決めてその実現のために行動する。という事を決めます。ほっとかないですぐ介入してアクションプランを立てる解決の方向で動くというところですね。高校生の時に朝作ったお弁当を思いっきりこう投げた時には私もちょっとイラってきましたんで、この怒りに関しては重要でやっぱり変えられることだかっていうふうに

思ったんで気持ちはわかりますけどもね、今まであまり育ちの中で認めてこられなかったのもそういう暴力的な自己主張する時にそんなふうには仕方をしたんだって気持ちはわかるんだけど、どうしてもイラッとした時に帰ってきてからみんなとこれについて話し合おうっていうふうにみんなと計画立てて話し合っただけで謝ってもらったり、「今度なんか辛いなって時はその気持ちを話してね」っていうふうには暴力でやらないでその気持ちを話してね。なんて事をしました。でその下の重要でない事は余力のある時にやればよいことで今考えても仕方がないなっていう事で、いつまでにどの程度変わったらいいか気が済むのかを決めます。時間がある時に解決すればいいっていうことですね。それから変えられないコントロール不可能な部分ですけどそれはもう現実的に受け入れるしかないですね今できる行動を探すってことです。天気が雨だったら運動会は外でできない。どんなに怒っても雨だからって言ってなんか学校に「なんで雨なんだ」っていうふうには中止にするんだって申し入れた親がいるって聞きましたけどやはり変えられない事は諦める。でも雨になったことができないだろうか、って具体的な対応策、体育館ですとかそういう事を考えるってことですね。それから最後こっちの重要ではないことですが、それは変えられないし重要ではないので結果としてほっとこうという事です。

次は怒りの性質です。怒りっていうのは高いところから低いところに流れるものです。ですから親から子へ虐待が起こるもこれですね。それから上司から部下へ、それから施設なんかでも支援者から支援される人へ、それから障害がある人がノーっていう事がなかなかできないのでホントに支援者は実は自分が高い所にいるんだっていうこの性質を知っておくことがとても大事なことだというふうに思います。それから次は身近な対象ほど怒りが強くなるか。夫婦DVですね。それから親が子供へ、だったり、ずっと同じ職場で何年も一緒に働いている人たち。DVが起こる構造もこれなのでやっぱり一番暴力で傷ついてしまうのは外ではちゃんとお仕事してても身内で怒りが出やすいってことは一番大切にしないでちゃいけない家族なんかを傷つけてしまう可能性が高いのも怒りの特徴・性質だっていうふうに覚えておいてください。

また3つ目。矛先を固定できないっていうのは怒りってこうなんっていうのか、課長さんが係長さんに怒って、イライラした係長さんは家に帰って奥さんに怒って奥さんは子供に怒ってみたい、どうも矛先が変わっていくっていう性質もあるんです。それから怒りは伝染しやすい。ここでもすごい怒った人がここにいたとすると、どうしてもそれに影響されて不安になったりしますよね、で逆に怒りになったりして伝染しやすい性質があります。それからエネルギーになるって先ほど自立支援運動でも言いましたけども力にもなります。なんかノーベル賞とった発光ダイオード中村先生って方も「自分の原動力は怒りだ」っていうふうに言ったんですけど、まあその方は怒りを前向きなパワーに変えて力にした方だと思います。さっきのあのエド・ロバースっていう方もアメリカで障害者の権利法を作成の場で証言した方なんですけども今もエド・ロバースのセンターみたいなものがありますけども、こういう方はこないだアメリカから来たお母さんに聞いたとことすごくやっぱり怒りをいい方に変えたって言ってました。ですから怒りをいい方に変えるって事もできるわけですね。でやはり一人一人が自分の感情を知って、相手を理解することで怒りの連鎖を断ち切ることができし福祉の仕事をする人は、自分を知ってやはり相手を理解することが大切なので怒りの連鎖を、どうしても怒りってありますのでホントに傷つけるような連鎖を断ち切るのが大事になります。はい怒りが出やすいって事を発とってこの状態の時に怒りが出やすいので皆さん気をつけましょうね。それから職場のメンタルヘルスの所に頑張るストレスが心臓・血管系とか、それから我慢するストレスは心の方に反応しますので、職場の中でやはり部下の人たちがあんまりこう頑張ればかりしたりちょっと我慢しているんじゃないかなってところは気をつける必要があると思いますし、またそのストレスは生まれ育った環境にも関わってきますので、それぞれいろんな職員がいるのでその職員を理解していく事が大事かと思えます。今年は春に入った職員で急にロッカールームでガンガンって自傷した職員とかいて、どうしたんだろう？と思って話したら、やっぱり育ちの中でいろんな大変さがあったって事を聞きました。はい、怒りが出たときは先程も言いましたけども深呼吸、たかが深呼吸されど深呼吸っていう事でゆっくりと腹式呼吸をして気持ちを落ち着かせる事がとっても大事になると思います。でそのことが、今マインドフルネスという事で世界中に広まってきています。で実際の脳の修復にも可能性が出ているというデータも出ていますので、私たちもただ静かにして呼吸をするという時間を三分間だけ職場でとっています。それから支援者の皆さんは利用者さんと、子供達といい関わりをするという事でやっぱり難しい状態にある子供や、利用者さんであっても肯定的に捉えるっていうのが一つの大事な身につけなければいけないスキルではないかというふうに思います。それがストレングスモデルでもありなにか私たちの側が正しくて私たちの側に持っているんじゃないかと、まずその人を理解し肯定していくところから始めるということが大事だしそのためにはスキルが必要なんだと思います。



福祉の現場ではやっぱり瞬間的にイライラするという事があるかもしれません。たださっきの6秒ルールを必ず皆さん覚えて欲しいです。児童福祉心理会も出ているんですけども、一生懸命勉強してる施設でも反射に負けて子供を叩いちゃったりする例もおなじです、ホントに人権侵害する気はなくても結果として人権侵害になってしまうって事がないように、ことを全国で言っているのが6秒とにかく待ちましょう。それともう一つが、人間ってそういう弱い所があるので人間強くないんだってところでは、やっぱりそれはチームでみんなでイライラしたらパッと手を挙げて助けを求めてそして、「うん、わかったよ」って言って変えられるような職場のオープンな雰囲気そういう雰囲気が作っていくって事が大事なのかなと思います。じゃないとやっぱり不利益が子供達や利用者さん、そして自分にも廻ってくるっていう、ソーシャルワークの逆のサイクルになっちゃうので、皆さん6秒とチームワークで是非自分のワツと怒りが出てきた時の感情を乗り切ってほしいなってふうに思います。で、時々お話を聞くってのもイライラして溜まったら普通、いい人だってそういうふうになりますので、職場の中で気持ちがいっぱいな時にこぼしたり頭がいっぱいな時に話を聴いてその問題を計画化したりちょっと話を聴いて違う視点から自分の悩みを感じたり失敗もホントは良い方向に向っているんだって事を人に話したら分かることもありあすので、こんなふうとにかく辛いことあったら話すことが大事だよって最近ウィリアム王子もダイアナ妃が36で亡くなったんだよって辛いことは話すことが大事だよって言ったって言ってましたけどやっぱり働いていると楽しい仕事だけじゃなくて辛いこともあると思うんです。その時はやっぱり皆で分かち合えるような集団作りをしていくことが大事かなと思います。また、運動とかも身体に良いです。ストレスに意外と良いんですねいろんな刺激が扁桃体にいくんですよ、延髄の所で止めてくれるってデータも出てて延髄を強くするには運動がっていう説もありますので皆さん身体も大事にしてください。セルフケアをいっぱい書きましたので時々支援する人たちは自分のケアを大事にしてほしいなっていう事もあります。

5

いいから、いいから

縁側対談(前編)

野沢和弘: 去年もお越しいただいて大好評で、齋藤市長になってから熱海ががらっと変わりました。熱海の取り組みをお話しただけだと思います。

齋藤栄(熱海市長): こんにちは。去年ここにお呼びいただいて、縁側フォーラムというのでどういうところかと思ったら、本当に縁側、お茶もみかんも出てくるんですね。こういうやわらかいというか、熱海的にいうとゆるい感じがいいですね。

最近熱海元気になってきたねと言われるようになってきました。この仕事をさせていただいて10年になりますが、2~3年ほど前から言われるようになってきました。熱海駅がリニューアルして、イメージも変わって、5年前の東日本大震災のときからお客さんも落ち込んでたんですが、この冬は過去最高の上昇率です。熱海がメディアで前向きな形で取り上げられるように

なってきた。若い人、カップルが来るなど再生した温泉地というように前向きに報道されている。これも自然になってきたわけではなくて、最初の5年は財政立て直しをしてきました。5年前平成24年に、職員が「ロケの誘致の担当をしたい」と言い、「じゃあ、やってみろ」といい、それがメディアに多く取り上げられるようになった要因となっています。かれこれ5年かかっています、ようやく成果が出てきたかなというところですよ。

熱海は観光に特化した街です。熱海にはまったく工場がない、煙突というものがありません。就業者人口のおそらく8割近くは何らかの形で観光に従事している。旅館、ホテルだけでなく、そこにリネン、魚や野菜などを入れたり、とにかく観光に携わっている方が8割くらい、ですからお客さんが来なければ潤わない街です。来月3月18~19日「縁側フォーラム in 熱海」ひとつはもちろん福祉をテーマにしていますが、外からお客さんが来て初めて潤う、ぜひ県外からもお越しください。

熱海にはもうひとつ別の顔があって、宿泊客で年間300万人、熱海の人口はわずか3万8千人です。高齢化が進んでいます。日本の高齢化率は平均26%、熱海は今45%、大体人口の半分は高齢者。一方で出生数は年間180人くらいしか赤ちゃんが生まれていない。赤ちゃんは熱海にとって宝。今年度はまだ87人しか生まれていないんです。一方で、去年1年間で600人くらいがお亡くなりになっている。過去50年間人口が減り続けている。市長として何が危機感かという、人口問題です。これから街が存続できるのが問題、数年前レポートが出されて、全国1800の自治体のうち多くの自治体が2050年までに消滅してしまうというところがどれくらい減っていくかという一覧をだしていますが、静岡23市町、消滅可能性都市県内での若手の人口減少がもっとも懸念されているのが熱海。それくらい厳しい状況です。

これからやりたいのは「住まう」まち熱海を作ることです。いくらお客さんがきて、経済が潤っても、そこに住む人がいなければ何のために街づくりをしているのか。街が潤って、住む人が幸せになれる街にしていきたいと思っています。お客さんが来て、生業が成り立って、まちが潤って、いただいた税金を有効に使わせていただいて、教育、福祉、人口問題に力を入れていきたい。自分がひとつ注目しているのが障害を持った方たちへの支援です。障害者福祉に熱海は力を入れていく、それが市民の暮らしを豊かにすることに一番繋がっていくことだと思っています。正直、この何十年間か熱海の市政は観光、とにかくお客さんを街によぶこと、これがずっ



齋藤栄熱海市長

と一番手に来ていた。そして市民の生活はいつも二番手、あるいは三番手になっていた。自分は市役所の部の並びも変えて、市民の暮らしを一番にもっていくということを始めています。そしてなぜ、障害を持った方への支援かというと、観光地というのは、結局来た方たちが心と体を癒してまたお帰りいただくということだと思っています。心と体を癒すというのは、単に高級なおいしい食事を食べるとか、景色を眺めるとか、温泉につかって体を癒すとか、そういうのは当然ですが、そこで



出会った仲居さんであったり、人であったり、ハード面での使いやすさとか、そういうものが大事だと思っています。障害を持った方にとって心地がいい、住みやすいということは、当然、高齢者にとっても、観光客にとっても、住みやすい街である、そのこと自身を受け入れ側である市民がきちんと認識することが前提であると思っています。

よく言われるのは、熱海は殿様商売である、黙っていてもお客さんがたくさん来てくれる、という時代が長く続きました。障害のある方に対する考え方を通じて、おもてなしというメンタリティー、ハードもソフトも含めて、今の熱海からまた一步抜きんでたレベルの高い、癒しと感動を与える場にしていきたいと思っています。今日は熱海の職員や、熱海の事業所の方たちも、何人も参加しています。熱海一体となって学んでいきたいと思っています。

北川聡子: 札幌東区にも障害のある方とか、貧困で子どもがたくさんいる家とか10人兄弟とか、DVとかいろいろあるんですが、そういう支援をすることで理解してくれる方もいるんですけど、なんで障害ばかり集まるんだとか言われることもあるんです。それで、町内会に出かけては一緒に活動したり、仲よくしようと一生懸命やってるんですが、市長さん自身がそんな風に考えるのが不思議っていうか、変わってる人?ていうかどうしてなんですか。

齋藤: 僕の話はちょっと置いて、熱海っていう街がそういう街なんです。よく言われるのは、ワケありの人が多い。例えば数字のことをいうと、高齢者のうち3人に1人が女性です。お一人暮らし。おそらく典型的なパターンは、高度経済成長期に全国から労働力として、仲居さんとして女性がたくさん熱海にやってきた。その方たちの多くが、いろいろとワケありで、ひとりで熱海に来て、またそこから新しい家庭を持った方ももちろんたくさんいらっしゃいますけども、そのころ30歳だとしてそこから50年経って、今80歳代くらいの方です。かなり高齢になって、率直に言うとそんなに所得が高いわけではない、正直生活保護の方もたくさんいらっしゃいます。熱海は県内の生活保護率の3倍です。1.7%くらいです。静岡はたいへん豊かな県なので、全国的には低いんですが、高齢化率だけではなくて、所得も低い。数字から見れば貧困です。また、ワケありの方が多い。それは逆に熱海の強みでもあると思っていて、女性がひとりでも生きていける街だと思っています。たとえば、スナックを開いてママさんになる、人生苦勞されていますからいろんな悩みを聞くことができる。また、東京のホームレスの方たちが最後に居つのが熱海と言われています。東海道線、東京から電車に乗って最終地が熱海。暖かいし、居つきやすい街。心が広く、いろんな人を受け入れることができる街だと思っています。

北川: シングルの方が多くなってきつと居場所になっているんですね。

齋藤: 積極的に受け入れているわけではないんですが、たぶん、メンタリティーというかもともと受け入れる土壌があるんでしょうね。スタンダードの家族の形でないといけないというようなものではなくて、懐の深さはあ

るんだと思います。暖かいし、気候もいいし、温泉もあるし、本当に豊かな街であると思います。そこにときどき甘えてしまうんですけどね。

野沢:80何歳のおかみさんが一人でやっている温泉宿があるんです。酒も出せない、料理も出せない、でも源泉かけ流しで、入り放題、1泊4,000円なんです。いつ行っても若いころの自慢話を延々と聞かせてくれるんですけど、これがまた味があって、結構やみつきになる。

齋藤:熱海的な風景だと思います。

北川:アメリカの東海岸で子どもを育てられなくなったら、西海岸カリフォルニア行のバスの片道切符を持って、カリフォルニアに行ったら何とか生きていけるっていう話を聞いたことがあるんですけど、日本のカリフォルニアみたいところですね。

齋藤:さすが北川先生、スケールが大きいですね。まさにその通りで、最近思っているのは、熱海市民が潤って、教育や福祉の充実を図るということももちろん大事なことなんですけど、外から熱海に来たいと思っている人に来ていただいて、熱海の人口が増えるっていうことも大事にしたいと思っています。熱海には網代という地域がありまして、小学校来年4/1、1年生1人しか入学しないんです。初島という静岡で唯一の有人の島がありまして、小中一貫なんです。全校生徒5人です。小学校2人、中学校3人。中学校2年生の男の子、あとはぜんぶ女の子です。こういう現状なんです。ただこれ、ネガティブではないんです。みんなすごく勉強ができるんです。なぜなら初島小中学校、5人の生徒に先生8人ですよ。給食を作ってくれるスタッフをいれると11人。教育は義務ですから。進学率も高い、進学校に行ける。そういうところを売りにというか、例えば首都圏ではなかなか学校に適応できないお子さんがやってきてくれて、自然の中360°海に囲まれた島で生活して、手厚い教育を受けるというのもいいのではないかと。野沢さんの母校、桃山小学校も駅から近いです。お父さんが新幹線で東京に通って、首都圏ではちょっと生きにくい子どもたちもぜひ熱海で過ごしてほしいと思っています。

野沢:熱海の魅力に気が付き始めて最近いろんな方たちが熱海で事業をしたいといっている企業があります。中村さん、どうぞ。さっき子どもたちの話が出ましたが、去年シアトルから2人の日本人の子供がやってきて、私の実家で合宿をして、ここにいる東大生がお世話役で付いてくれました。そういうのもいいですよ。

中村淳(サンクステンプ社長):運営会社がテンプスタッフという人材派遣会社です。そこの特例子会社です。比較的古い特例子会社として25年目です。日本には430社くらい特例子会社があり、当社は設立順位でいうと50番目くらいです。特例子会社というのは障害者雇用を目的にした会社として、当社は200名くらい社員がいてそのうちの9割が何かしらの手帳を持っている社員、9割のうちの6割がいわゆる知的障害をお持ちの社員です。今いろんなところで事業の拡大を考えていて、平成30年に法定雇用率がおそらく2.3%に上がる。全体で3万人くらいの従業員がいるので、現状から数百人雇用を拡大する必要があります。東京・大阪・名古屋は企業が多いので求人が多くて、それと同数くらい地方ならではのものを事業化していこうと思っています。いわゆる衰退産業に障害者がかかわることで、地域が活性化していくと考えています。熱海市でいえば観光事業等、地域の特徴たる地場産業を次世代に伝える、そういうことを障害者雇用がやることで地域からも期待されるのではと思っています。地域の皆さんが大切にされているものを、しっかり地域から歓迎されるように作っていきたくて考えているところです。

北川:あんまり雇用のことはわからないんですが、小さい頃からかかわってきた子たちがいろんな場で力を発揮できるのが嬉しいなと思って聞いていました。時代はだんだんよくなっていくんだなと。

野沢:もうひとりゲストをお招きします。熱海には音楽が足りないのではと思います。楽しくないと人は来ないですよ。かしわ哲さん、どうぞ。

かしわ哲(NPO法人ハイテンション代表):元NHKの歌のお兄さんです。サルサガムテープというバンドを23年やっています。日本で初めて知的障害のある人たちのロックンロールバンドで、プロでやってるんですけど。11/2に日本武道館でライブをやりました。2020年のオリパラに向かって文化で盛り上げていこうというコンセプトで、歴史的なことだと思っています。ロックの聖地武道館で知的障害のある方がロックンロールしたっ

てことは、やったー!サイコーに気持ち良かったです。

6年前から神奈川県厚木市でNPO法人ハイテンションという事業所を立ち上げて、生活介護「Jump」、放課後等デイサービス「スローバラード」、ヘルパー業務が「Love jets」、これを聞いてあーって思う方は相当な清志郎ファンですね、全部忌野清志郎さんの楽曲から取りました。Jumpとうところで、ほかの事業所がパンやクッキーを焼くように僕たちはロックンロールをやっている。それで全国ツアーしてお金を



かしわ哲さん(右)

もらって、ロックンロールバンドで生きている、いわゆる工賃をもらっている。ドラムは梶くん、元ブルーハーツの梶くんできて、楽しくやっています。やっぱり生活介護でロックンロールやるって前例がなかったですからね、神奈川県も、最初変な人がきたなあって本当に事業所やるのかなあってね、大変だったんですけども。専門性があるから福祉やるっていうのではなくて、何か特化している人が入ってきて楽しいものをつくっていく、制度ができて形ができたときに次はどうしていくかって、どういう豊かなものを、どういう楽しいものやっつけていけるか、みんなで考えていく。実は楽しいもの、楽しいことをみんなで考えて続けていくってとっても大変なんです。深刻な顔して真面目な顔して考えていく方がよっぽど楽なんだけど、毎日明るく楽しくにこにこして笑って生きていこうって一番豊かな社会なんだけどそれを突き詰めていって実は大変なんです。芸能とか娯楽とか芸術とかって低く見られがちなんだけど、実はそれをやっっていくことがみなさんの生活をどれだけ豊かにするか、そこを振り返ることが大切で、私たちの場合は、たまたまロック音楽が何よりも大好きだし尊敬しているし、それをみんなしてやっつけていこうと、プロフェッショナルな人たちが新規で入ってきて、うちは子どもたちが来るとずっと音楽やっつけて「OH! イエーイ!」とか「オッケーベイビー!」とかいってやっつけてますが。

今やってることは2020年に向けて、ロックバンドやダンスパフォーマンスとかがいろんなところで活発で行われていて、全国ツアーの先々でネットワークを作って、いわゆる「感動ポルノ」みたいなつくりこまれた障害のある人たちの笑顔とか世界観ではなくて、もっと豊かな文化や芸術・芸能としてアールブリュットとかもありますけど、そういったものをじっくり作り上げていこうとっています。

野沢:最初にかしわさんのところに行って、名刺交換したら、名刺の肩書に「ロックンロール介助士」って書いてあった。「え、なんですか」って聞いたら、「あ、まだ国家資格にはなってないんだけど」って。ロックンロールで介助してるんですね。かしわさん「人生いろいろあったけど、ロックンロールだけは俺を裏切らなかった」って言ってたんですね。

かしわ:ロックンロールはこんな私をずっと見捨てなかった。見捨てないで最後まで寄り添ってくれたんです。どんなときでも。ほかの方々が、「あいつはどうしようもない」って言ってたときも、20代なんか手につけられない、どうしようもない男でしたんで。ロックンロールはずっと「そんなお前を愛してるよ」って言って、「全工程、どんなお前も全部受け入れるから」って言って、私が嫌いにならない限り、いつも傍にいて、寄り添っていただいて、支援していただいたので、こうやって今日私はここにいるっていう。とても福祉の見本のような。しかも、ロックンロールは差別しない、学歴あろうがなかろうが関係ない、人種も関係ない、どんな人でも歌いたくなったらギターをとってシャウトすればいいんだ、それでOK! ベイビーっていうね。これは本当に福祉の基本だと思うんですね。

2020年、もうひとつしたいことがあって、それは観光のバリアフリーなんです。新幹線、車いすって1室しかないんです。言葉だけ、形だけのものじゃなくて、障害のある人たちが世界中からやってきて、リオは大成功ですごい注目されていますし、実際世界中からたくさんの人たちがやってきたときにどうするのか。で、熱海を日本を代表するバリアフリーな観光地として、トラベルケアセンターみたいなものを作って、どんな障害のある人たちも楽しめて、サポートして、親御さんはじゃあ別のところに観光に行ってください、その間お子さんは私たちがアテンドしますからって、それぞれに楽しめるようなそういったことが整っている観光地が東京から近いところにあるっていう、それを世界に示していくっていうのをやりたいんだよね。ただのロックンローラーだけだね。世界に胸を張って示せる場所ってやっぱり熱海じゃないかなって。象徴的なね。バリアフリーな街にして、みんなで訪れることができ、アテンドができ、そしてできたら芸能・芸術的なものをね、楽しめる場所があるとさらに胸を張って世界に向けてアピールすることができる、素晴らしい観光都市になると思います。

野沢: バリアフリーとかユニバーサル化するとビジネスにもかなり有利になると思います。野球場で車いすシートどのくらい? 東京ドーム 12席しかない。前の広島市民球場は3シートずつでした。かつての甲子園球場は3塁側に数席しかなかった。阪神ファンなのにいつも巨人ファンの中でしか応援するしかなかった。ところがどんどん変わってきて、今シーズン、セリーグを制した広島、マツダスタジアム 142席。多目的トイレ 20数か所、そのうち半数はオストメイト対応。それ以外に知的障害や精神障害のある方、難病の方に対して手厚い接待をするホスピタリティスタッフを毎試合 10人置いている。どんどん観客が増えてきて、カーブが強くなってきたこともあるけれど、観客動員数は巨人、阪神を追いつくぐらいになっている。楽しいことに対するニーズが強い、それに気付いて企業と結び付くと効果がすごい。さあ、市長さんどうしますか。

齋藤: まるで議会ですね(笑)何でもそうですが、一夜の改革はないと思っています。熱海の話をしました、10年死ぬ思いでやってきました。ようやくこの数年でやっとお客さまが増えてきて、「熱海、元気になったね」といわれるようになってきた。実はバリアフリーの話、福祉の話、きっかけになるのは2020年がひとつの目標でして、熱海は坂道が多い。平地がないんです。すぐ山道で、クネクネ山道、歩道もない。だからこそやらなくてはいけないと思っています。歩いて楽しい街づくりというのを掲げたんですが、最初誰も相手にしてくれなかった。長崎出張に行ったときにこれだと思って、コツコツやってきました。10年かかって今は少しずつ効果が出ています。やっぱり10年にかかるんじゃないかと思っています。インセンティブというか、バリアフリーをやるのが事業者さんの利益になるということをうまく組み込まないと、言葉だけの福祉になってしまう。簡単に言うとお店にそういうスペースを置くことが売り上げが上がることにつながる仕組みにしていけないとなかなか難しい。市長だけではできません、みんなでやっていきたい。ただ、先頭に立ってやっていきます。

かしわ: スウェーデンに行ったときにバリアフリーってハードを整えたりっていうお金がかかる話ばかりでなくて、精神性だと思ってたんです。そういうものがにじみ出た観光地ってやっぱりすごくいいんじゃないかなって思うんですよね。



東大生たち

野沢: 北川さんに夢を語るおじさんたちについて聞いていきたいんですけど。

北川: すごいロッカーだと思っていましたね。本州ってやっぱりすごいですね。北海道にいたらオリンピックって遠いですし、うちの子たちもバレエとか習っている子が多いんです、発表会とかでるんですけど、オリンピックって意識したことなかったなーって、ビジョンの作り方っていうか本州の人たちってすごいなーって。すごい発想だあって。北海道って外国みたいに過ご

してるところがあって、もっと本州の風があった方がいかなって。サンフランシスコも坂が多くて道がガタガタしているようで、でも意外とキャリーバックとか運びやすいんですね。坂とか、あとホームレスの人たちとか寝ていたりしますが、いろんな人がいる街だな、包容力が高い街だになって思いますね。熱海に来たら楽しいことがあって、劇場とかあるんですか。劇場型温泉とかあったらおもしろいですよね。

齋藤：市民ホールは解体をしてないんですが、先日薪能を海でやりまして。自然の海岸が舞台なんで

すよね。熱海の強いところですよ。立派なホールや音響設備はないんですが、人工海岸なんですが自然の中の能舞台、それはそれでいいですよ。

北川：市長さんの発想がいいですよ。一夜にして簡単にはできないけれど、ビジョンとパッションを持ってやっていくっていうエネルギーを感じましたね。刺激的ですね。

野沢：今音響と聞いて閃いたんですけど、熱海の花火ってすごいんですね。年20回くらいあるでしょ、花火大会。

齋藤：海上花火大会をやっています、去年は16回ですが、今年は18回やります。全国たくさん花火大会があるんですが、熱海のいいところは音響効果がすごくいいんです。なぜかという、山が海に迫っていて三方を山に囲まれていて会場にいるとお腹で感じる花火、どかーんと。テンポよく30分で5,000発くらい上げますので、どかんどかんと体で感じる花火、長すぎなくて疲れな。海上花火大会はそういう意味で最も熱海の地形を生かした自然のステージだと思います。

野沢：海上サルサガムテープライブ。いいですね。音響効果すごいですよ。

齋藤：屋外ステージはビーチもそうですし、防潮堤のところでもちょっとしたステージがあります。夏はビール祭りの会場にもなって、そこで音楽ステージ作ったりしてます。

野沢：だんだん盛り上がってきたところですが、縁側対談、前半はここで閉めたいと思います。続きはこの後の懇親会で盛り上がりましょう。



6

いいから、いいから

縁側対談(後編)

野澤:後半は静岡市で活動している「ままぶくろ」です。

金澤:高齢者が通うデイサービスのママバージョン、ママケアデイサービスがあったらいいな。あるべきなんじゃないかなと思って2011年に立ち上げました。私たちは子育てしている主婦なので、まずは仲間作りと場所探しからということで、ママの部活動とあって、特に資格はなくても、趣味を極めたお母さんが「部長」や「講師」になって部活動形式で楽しいを入りに月1回単発での活動を始めました。私自身は転勤族で10年前に夫の転勤で静岡に越してきました。生まれは北海道で、埼玉県で1人、

兵庫で1人、長野で1人産んで、10年前に静岡に転勤になって静岡で1人産みました。自分自身も子育てをしていて、生後2か月にならない子を連れて兵庫県に引っ越したときに、ひとりぼっちというか、実家も遠いし、頼る人がいない中で助けてもらったのは、そばにいた友達で同じ子育てしているお母さんで、ちょっと先に行くお母さんに助けてもらった日々でした。

そんな中寝不足でふらふらでだっこしながら外に遊びに行くんですけど、高齢者の方は家の前にお迎えのバスが来てデイサービスに行くんですね。デイサービスに行ってお昼ごはんを食べて、お風呂に入って、体操したり、おしゃべりしたりして帰ってくるんですけど、私たちもそんな時間があるのもいいんじゃないか、月1回でも休息できる時間があったら、「子育てがんばるぞ」という気持ちが湧いてくるし、それは子育てする気持ち、養う力を作ることができる大事な時間になるんじゃないかって思います。

最近、子育て支援って言われるんですが、子育て支援と同時にやっぱり子どもを育てているお母さんを支援することが大事なんじゃないかなって思います。26年9月に市長とカフェトークに応募して、「ママケアデイサービス、必要なんです。子育て支援の前に母親支援をしてください、やらせてください」と訴えました。その後、

市の担当局から電話がかかってきて、ママケアデイサービスについてお話を聞かせてくださいと、そのあと打ち合わせを重ねてきました。でも、市の事業を受けるには法人格がないと受けられず、私たちは身の丈にあったものをやっということうことで、リンパケアサロンをやっている方と一緒に2016年6月からママケアデイサービス「ままぶくろ」を始めました。「ままぶくろ」というのは、ママのニーズを入れる袋、お母さん方って子どもの月齢やママによってニーズは違うので、その都度ママのニーズを聴いてどう応えられるか積み重ねているところです。月1回定員は3組です。アンケートを毎回お願いしています。

井上:どんな目的で利用したいか、アンケート300人のうち9割が交流、その次が体のケア肩や背中の中のリンパケア、交流もアドバイス情報交換という

より、ただ大人とおしゃべりしたい、赤ちゃん以外の大人と話したいという意見が多かったです。特に第1子を育てているお母さんは、ずっとおうちにいて、話し相手がない、1日赤ちゃん以外誰ともしゃべらないお母さんが多く、引きこもりがちで、状況を打破したくて公園や支援センターに行ってもまた一から関係を作っていかなければいけない、特にお仕事をしていない、子育て中心のお母さんは、逃げ場がない状態で子育てしている、お金を払っ



ままぶくろ

て自分のケアをする、休息时间を取るということにすごく罪悪感を持っている、子どもを預けてまでして自分の時間を作るというのがこの子にとって本当にいいことなのか悩んでいる人が多いです。

ままぶくろは、お母さんと子どもが同じ空間で過ごすことができる、お母さんは2階でリンパケアを受けて、子どもは1階でスタッフがみている、実家のリビングでくつろいでいるみたい。保健師さんなど専門職の方に相談して専門的な言葉で答えてもらうというのではなく、他愛もない、専門的でないことを雑談の中で先輩お母さんに話すことができる、「そういうことあるよね、大丈夫だよ。そのうちなんとかなるよ」といった軽い一言が心の癒しになったという意見をいただいています。

北川: すごく大事な活動ですよ。子育てって普通に何千年も続いていることですが、今は、出産はどういう風にするの、どう抱いたらいいの、とかおじいちゃんおばあちゃんがそばにいないし、お母さんひとりで、孤立して大人と話ができるのが宅急便のおじさんだけとかよく聞きます。どこで自分の気持ちを聞いてもらいたいかわからない、子どもの発達も心配だけど正常かどうかかわからない、ほっとする場が必要ですよ。今まで「子育て＝母親がするものでしょ」とか「我慢しなさい」とか風潮があったけれども、だんだんお母さんたちが発信してきていろんな活動が増えてきていますよね。

金澤: 私たち以外にも、法人格を持たないで、任意団体や個人、家で活動しているお母さんたちもいっぱいいるんです。でも、1回開催するのにお金がかかって、定員が3名、月1回だけで、お母さんのニーズからすると回数を増やしていきたいけど、増やせないんです。

北川: 本当に思いでやってるんですね。

金澤: そうです。そうです。やってる私たちも楽しいので、盛り上がりすぎて反省することもあるんですけど。リンパケアサロンのままぶくろ、定員も回数も少ないので、次を予約してもらうことが難しく、リピーターの方向けに70分自分時間を持つことができる「おひとり様時間ままぶくろ」を今月から開催することにしたんです。定員2組で来てお母さんが、「針仕事したい」「お茶を飲んで一緒に話をしたい」というお母さんがいて、「お金を払ってまでおしゃべりしたい」というお母さんがいるんだ！て新しい発見でした。

北川: 社会教育委員というのをやったときに、働いてるママの方がメンタルヘルスがいい、ずっとお家にいるママのケアがもっと必要だっていうデータが出たんです。まさにそのケアをされているんですね。働いてるお母さんは迎えにいったおっぱいあげてる間にめちゃくちゃしゃべれるんです。

金澤: 今、子育て支援とかで働いてるお母さんへの支援でたくさんできてきたんですけど、専業主婦、子育てを中心に行っているお母さんも休息したいんです。

川口正義: 私はもともと児童養護施設の職員、でそのあと仙台から横浜寿町ホームレス支援に通い続けて、児童養護施設で子どもを待っていたら遅いと32歳で相談室を立ち上げて、今28年目。その間、スクールソーシャルワーカーをやったり、一般社団法人を立ち上げて子どもの貧困関係をやったりしています。出会ってきた子ど